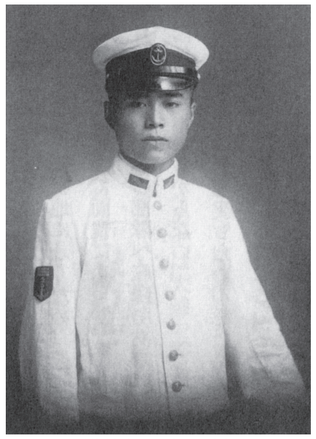
永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談⑱

私の夫 順一は、5人兄弟の長男で、海軍の特攻「蛟龍（こうりゅう）」の搭乗員でした。出撃の前日に終戦を迎え、戦争体験記を書いていました。その手記を基に、夫の弟の寛が、表題のような本を出版して、戦争の惨劇と平和の尊さを人々に訴えています。このたび、本紙のこのシリーズを知り、また、市の広報担当の人からのお話もあり、横井寛の快諾を得て掲載させていただくことになりました。



横井順一（17歳）

五分間の決断

「特殊潜航艇『蛟龍612号艇』横井順一の手記」
（平成23年㈱美巧社発行）
横井寛編から抜粋

柞原町　横井　康代さん

五分間の決断

昭和19年8月27日、夕暮れどきのことである。滋賀海軍航空隊の練兵場に、予科練甲飛十三期生の全員が集められた。重大な話があるとのことで周りの人払いをして、上級幹部だけが残った。

海軍少将森本丞司令がゆっくり号令台に立った。普段とは少し違う。無言のまま私たちを見渡し両手で手招きして、

「皆もっと近くへ寄って来い」

司令の目には、涙がこぼれ落ちそうである。〈これは大変なことが起きそうだ〉と感じた。しばらく黙っていた司令が思いつめた表情で口を開いた。

「今や敵の反撃は激しさを増し、戦局は急激に緊迫、祖国はまさに危機にさらされている。今までのような戦法ではとうてい立ち向かえない。そこで、このたび我が海軍においては、画期的な○（マル）兵器を開発した」

司令は話の途中で黙った。私たちをじーっと見回してから、言葉を続けた。

「一撃必殺の兵器で、極めて危険が伴う。この要員には、攻撃精神旺盛な諸君のような若者が必要である。2、3か月の訓練を受けた後、ただちに実戦に参加する」

副長が司令に代わって号令台に立った。

「熱望者は二重丸、命令どおりにする者一重丸、希望しない者は何も書かずに提出せよ。考える時間は五分間、良く考えて決断すること。私語もよそ見も禁止する」

小さな白紙が配られてきた。背筋に冷水が流れる感じがして、白紙を受け取る手が震えた。

〈どうしょう。応募すれば、2、3か月の命である〉5分間で決めなければならない。17歳の私たちの命が、たった一つの符号の選択で決まることになる。

横目で他の人を盗み見た。弟がいる右隣のMは、感激したらしくすぐに記入してしまった。左側の一人息子のTは、鉛筆を握りしめて目を閉じ、うつむいたまま考え込んでいる。この○兵器は、水上を走るか水中を潜るか全く分からないが、生きては帰れない体当たり兵器だと思った。

白紙を見つめたまま迷っていると、父母の顔、弟たちや妹の顔も浮かんでくる。だが、誰（だれ）も黙ったままで何も言ってくれない。

叔母の顔も浮かぶ。9か月前に入隊することを知らせたとき、「なんで志願したの。死に急ぐことないやろ。今から止められないの」

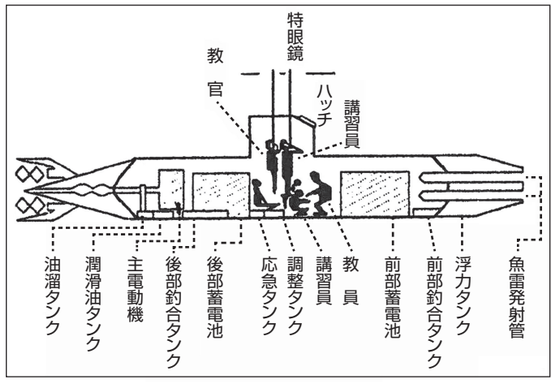
戦争で夫を亡くした叔母が寂しそうに言ったのを思い出す。鼓動が高鳴り刻々と時が経っていく。

〈もう時間が無い〉

水に溺れかけた弟（三男の實）を飛び込んで助けたときのことが目に浮かんできた。〈家族や周りの人たちを守るためには、やっぱり自分が捨て石になるべきではないか。○兵器に乗るんだ〉やっと決断することができ、震える手で力強く二重丸を書く。

選考の結果、選抜された者は全体の一割でちょうど百人。私の名前も入っていた。

数か月を待たずに戦地に行くため、遺骨の代わりに髪と爪を切って両親に送った。



訓練艇の略図

帰郷

昭和20年8月23日に、小豆島基地から艇を広島県の倉橋島にある特殊潜航艇の基地に回航して任務は終了した。

運良く徴用した船便を利用して愛媛県の三津浜に渡った。国鉄松山駅から上り列車に乗り携帯用工具袋を後生大事に抱え、心地よく揺れる車内で故郷を思い出す。

2年ほど前のこと、郷里の人たちから歓呼の声に送られて予科練に入隊した。基礎訓練の終わる頃、「○兵器要員」の募集があった。どうしようか迷ったあげく、飛行機から水中特攻隊員になる。

危険が伴う訓練を積み重ね、満を持して本土防衛のため紀州沖へ出撃の途中に終戦。戦機を失くして図らずも生き延びたが戦死した先輩や仲間たち、そして訓練中に不慮の死を遂げた戦友たちの面影が交錯する。

丸亀駅のホームに降り立った。早く帰りたいと心は弾むが、仲間の死を思うと、戦に負けた生き残りが大手を振って帰れない。人目を避けて裏道を急ぐ。

わが家に近づいた時、Aじいさんに出会った。

「予科練に行って無事に帰れてよかったな。Tの息子は沖縄で戦死したよ。あんたと一緒に入隊したO君も戦死した。後から行ったK君は訓練中に殉職したそうな」

身近な予科練の仲間が三人も死亡していたことに、胸を締め付けられる思いがする。なかでも前年の夏、一週間の休暇をいただいて帰ったとき、私の七つボタンの二種軍装（白い夏服）姿を見た年下のK君が、予科練に憧れて若い命を失っていた。休暇の時の出会いがなければ死ななかったのかもしれないと悔やまれてならない。

「飛行機乗り！よう生きて帰ったのう」

「私は飛行機から、特殊潜航艇に乗っていた」

「真珠湾に行った二人乗りか？」

「その艇を改良した五人乗りの蛟龍だ」

「そうだったんか。そこで、内緒の話じゃが、あんたの艇をどこぞに隠しといたんか？」

元気なAじいさんは、戦争に負けたが間もなく再起すると思っているらしい。艇は呉に集結させて武装解除する。搭乗員は直ちに帰されたと話して納得してくれた。

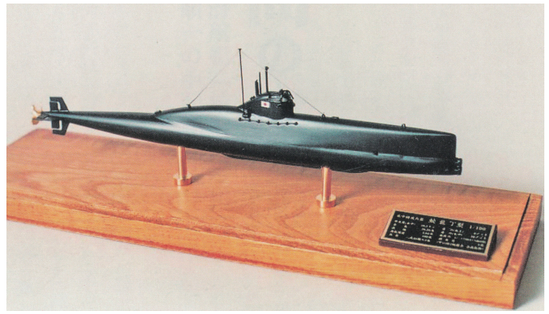
「あんた海軍で鍛えた腕で、いろんなことを皆に教えてくれ、頼むぞ！早う帰って親に元気な顔を見せるんだ」Aじいさんは私の肩を軽くたたいた。

神棚と仏壇に手を合わせ無事に帰れたことを報告し、家族で喜び合うのも家の内だけである。隣や裏の家には世帯主が戦地に行ったままで安否が気づかれており、近くに戦死者の出た家も数軒ある。村の中で早く帰れた私はなんだか肩身の狭い思いがした。

蝉の声に誘われて裏庭に出た。木漏れ日の井戸端で汗を流した。

平成21年12月5日、夫 順一の葬儀が行われました。その棺には軍艦旗がかけられ、『海ゆかば』の曲が静かに流れていました。

（本紙掲載にあたり、編者の許可を得て、修正、割愛などをしています。また、この本は中央図書館に寄贈されています）。



特殊潜航艇『蛟龍』の模型